

はじめに

女性史に取り組む私たちにとって、1995年は象徴的な年だった。時を同じくして、東の北京では第4回世界女性会議が、西のモンテリオールでは女性史研究をメインテーマの1つとする第18回国際歴史学会が開催された。

北京会議は、女性がよりよい社会を築くための変革の主体となるべく力をつける、という意味のエンパワーメントをキーワードにして、性別役割分業を変え、ジェンダー関係をつくりあげている構造そのものを変革しようとする、世界の女性たちの連帯の表明の場であった。他方モンテリオールの女性史部会は、歴史分析の基本用語としてのジェンダーの意味を強調し、歴史研究のさまざまな分野にインパクトを与えることを目標としていた。そして女性史の課題として、「女性、男性、ジェンダーに関する諸意見を、主要な歴史的变化についての中心的な定義づけの中に統合すること、あるいはこれらを中心部に置き換えること」(ナタリ・Z・デイヴィス)を掲げていた。

両会議が取り上げているジェンダーという語は、女性・男性という差異が、生物学的・解剖学的性差(厳密には差異がどういうものか明確化できているわけではない)の面より、社会的、文化的、経済的、心理学的につくられてきた面が大きく、一般に後者によってつくられた性差という意味で使用されている。このジェンダーは、人間生活のあらゆる領域にシステム化、構造化されており、それらすべてが両性間の力関係の不均衡をつくりだしている。北京会議はこうした構造の変革をめざし、女性史部会は過去の歴史からこうした構造を浮き彫りにし歴史の書きかえをめざした。

歴史の主体であろうとする女性、そして女性を歴史の主体として叙述しようとする歴史家たち、この2つの世界会議はフェミニズム運動の国際的な高まりに呼応したものだだった。

こうしたなかから作られた本書は、I フランス、II イギリス、III アメリカ、IV ドイツ、V ロシア、VI 世界の女性の連帯、という構成をとって

ii

いる。女性を歴史の主体的担い手と位置づけ、歴史に女性の行動をよみがえらせることによって、私たちは彼女たちの行動について新しい情報を得るばかりでなく、女性を見、理解する別の方法が生み出されるはずと考える。そして、なぜこれらの事実がこれまで無視されてきたのか、なぜ今それらが理解されるようになったかについて言及していくことは、歴史が政治と深く結び付いていることを明らかにするだろう。今日、歴史の叙述に女性の行動を描くことが当然視され、多くの国で女性史が出版されているのは、ひとりフェミニスト歴史家の努力ばかりでなく、世界的なフェミニズム運動の高揚のなかにあって可能となったといえる。そして、フェミニズム運動に触発され鼓舞されたメンズ・リブ(男性解放)の運動の展開のなかで、歪められた男性像から創られた歴史の問い直しも始まっている。

本書は、自覚的なフェミニズム運動が始まる18世紀のフランス革命期から始めている。しかしこの一方で、男性の支配する革命政府は、女性の政治集会を禁止し、女性クラブを解散させるなど、しだいに革命より女性を排除していった。こうした矛盾やパラドックスを歴史分析に入れることにより、革命が女性そして男性にとってどういうものであったかがより明らかになり、歴史認識を深めていくものとする。さらに、女性参政権獲得運動や社会主義国の女性組織等を見ていく時、「男性支配の構造に反対する」ことを掲げるフェミニズムが、同時に女性間での階級、人種、セクシュアリティ(性文化)、民族、宗教などの多様な関係のなかでせめぎ合う諸相をも捉えることに努めた。

そして今後、女性史の課題は、こうした差異化の構造そのものの解体までを視野に入れながら、従来の歴史の書きかえを進めていくことにあろう。